

1952年と戦後日本の断層

－小林勝の『断層地帯』に見える戦後認識－

井上幸子*
sa2837@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 4. 強制送還される朝鮮人 |
| 2. 朝鮮への負債という自我の誕生 | 5. ターニングポイントとしての1952年 |
| 3. 北原と朝鮮戦争 | 6. さいごに |

主題語：敗戦(defeat)、戦後日本(postwar japan)、朝鮮戦争(Korean War)、強制送還(forced repatriation)、1952年(1952year)

1. はじめに

小林勝は1927年、当時の植民地朝鮮で生まれた作家である。中学校までを朝鮮で過ごし、陸軍予科士官学校に入学するために渡日、陸軍航空士官学校在学中に敗戦をむかえ、戦後は日本共産党(以下共産党)に入党する。入党後はレッドパージ反対運動や朝鮮戦争反対運動に積極的に参加したが、1952年、集会の最中に火焰壘を投げたとして放火の現行犯で逮捕される。その後約半年間の刑務所生活を送るのであるがこの期間に本格的な執筆活動を開始し作家としての道を歩むことになる。このような小林勝の一連の生き方を見ると過激な運動家というイメージを強く持ってしまう。しかし小林勝の過激な行動は単に戦後日本社会への不満を吐露したのではなく、背景に小林勝が生まれ育った朝鮮が大きく関係していたのである。そして小林勝が近年注目されるのは小林勝の戦後の生き方が<朝鮮への負債>を返すという信念によって形成されているからであり、<朝鮮への負債>が現代においても解決されていない問題だからでもある。

小林勝が朝鮮を意識したことを裏付ける根拠として「ある朝鮮人の話」¹⁾という強制送還

* 嶺南大学校 日語日文学科 博士課程

される朝鮮人の男をモチーフにしている作品で作家デビューをしたこと、1956年から1957年にかけて植民地朝鮮を舞台にした作品を集中的に発表していることがある。これらの作品には朝鮮の自然の豊かさと美しが多く盛り込まれており、故郷としての懐かしい朝鮮を感じることができる。しかし同時にこれらの作品に描かれている朝鮮は朝鮮に移民していった日本人たちが朝鮮人たちを排他して形成した朝鮮の中の日本人社会である。小林勝がこのような植民地朝鮮を意識した作品を発表したのは懐かしい朝鮮を描きたかったからではない。戦後の復興の中で朝鮮問題は補償されるどころかやっかいな問題として扱われていたからである。しかも当時の問題は今日においても両国間の解決されない問題、例えば慰安婦問題や在日コリアン問題として残っている。朝鮮問題が戦後日本社会で忘却されようとする中、小林勝は作品を通して朝鮮問題に真摯に向き合ってきた希有な作家だったのである。

しかし小林勝は敗戦後すぐに朝鮮問題に目をむけたわけではない。朝鮮問題を意識するようになった背景には、小林勝自身が敗戦後の日本で軍人から一般人へと復員していく中で日本社会から受けた屈辱や絶望感が関係していたのである。小林勝は自身のエッセイの中で戦後の自分の状態について次のように告白している。

ぼくはその春七年制高等学校にはいって、尋常科から順当に進学して来た友人たちの博識ぶりに殆ど絶望的なひけめを味わった。(中略)ぼくは負けぬ気になり図書館にいりびたって本を読み漁ったが、なるほど、なるほどと思うばかりで、すでにささくれているぼくの感性一分の隙もなくびたりと貼りついてくるようなものがない。ところで、そういう感じに悩まされ、しかも自分自身の正体をとらえかねているぼくは、そうした状態にあるのが何もぼく一人ではなく文科のクラスの中には思いのほか多勢いることに気付いた。²⁾

小林勝が編入学した高等学校で「ひけめ」を感じたのは敗戦を境に日本全体の戦争認識が変化したからだと考えられる。小林勝は戦争中、士官学校に通っていた軍人の卵だった。戦争中將校になることは羨望の対象であったし、名誉な将来の選択であった。しかし敗戦を迎えると復員兵に向けられる視線は戦争中とは全く反対の視線、つまり戦争に敗けた原因をつくった者たち、特攻くずれという流行語に見られるようなやっかいな犯罪者たちへと変化した。1945年以前の軍人という自我が戦後日本社会から否定されただけでなく復員將校生徒たちにおいては編入学した学校でも戦場に直接行っていない同世代たちから追い

1) 小林勝(1952)「ある朝鮮人の話」『人民文学』12月号

2) 小林勝(1955)「十年」『新日本文学』11月号、新日本文学会、p.261

詰められていったのである。³⁾ この時に小林勝は学生運動に出会い、戦後生きる道を共産党に見出したのである。

しかし小林勝は1952年の逮捕をきっかけに共産党の第一線から退くことになる。逮捕されたことによって小林勝の戦後認識に変化が起こったためである。変化の引金は拘置所内で強制送還されようとする朝鮮人と出会った⁴⁾ことや、共産党からの一方的な切り捨てによるものである。小林勝にとって刑務所が戦後のターニングポイントをむかえる場所だったのである。小林勝の作品を見てみると、植民地朝鮮を描いたものが多数ある一方で、刑務所を題材としたもの、背景とした作品も多数見ることができる。例えば「引越しそば」(1953年『人民文学』1月号)、『刑務所』(1955年、現在の会編、柏林書房)、『断層地帯』(1958年『新鋭作家叢書』九、書肆パトリア)などが挙げられる。小林勝がエッセイの中で「私は、小説らしいものを、小管の拘置所の中で書き出していた。私は自分の中の朝鮮のイメージを少しずつ、とり出し、分析していこうと思っていた。」⁵⁾と言っていることから分かるように、刑務所という場所が小林勝にとって重要な意味を持っていたことが理解できる。

本稿では『断層地帯』という作品を取り上げるのであるが、この作品は主人公の北原が共産党の軍事武装行動隊に入り、火焰壘を投げたという放火罪で逮捕され、警視庁から拘置所を経て釈放されるまでの出来事を描いている小林勝の私小説的な作品である。しかし、ただ単に当時の出来事を描いているわけではない。小林勝の戦後のテーマともいえる<朝鮮への負債>を抱くに至った過程を戦後日本を取り巻く世界情勢が絡められて描かれている作品なのである。

小林勝に関する従来の研究は植民地朝鮮における植民者の自我に焦点を合わせたものだった。中でも磯貝治良は小林勝の文学について「一種の<戦後責任>の自己追及だった」と総括しており、後期の作品が「日本と朝鮮あるいは日本人と朝鮮人のかかわりをとらえる視線は、いっそう陰しいものになり、呵責をうかがわせるものになっていった」のに対し、前期の作品は「小林勝における文学の<内なる原風景>を、私たちに伝えてくれている」と分析

3) 小林勝の作品中「赤い壁の彼方」(1958年『文学界』1月号)には、軍関係の学校に通っていた将校生徒たちが編入学しようとした高等学校に入学を拒否される姿が描かれており、「零地点」(1963年『文学界』4月号)には編入学した高等学校で他の学生となじむことができない元将校生徒の姿が描かれている。

4) 小林勝(1970)「私の「朝鮮」」『チョッパリ』三省堂、p.297

「警視庁留置所で、ゆたかなバリトンでインターをうたい、シンのたてがみに似た長髪をふって微笑みかけた君は。朝鮮の同志よ、(中略)五年目めに出獄してなお、朝鮮人であるただそのために、手錠をはずされず、ことごとく看守とぶつかった君は。鋼鉄の小さなマリのようなり・ショウ・ケイは。(中略)三年の刑をおえ、その瞳にまだ少年の日のなごりがゆらめいているのに、朝鮮人であるただそのために、死の確実待つ君の国へひきたてられていったソウ・ザイ・インは。」

5) 小林勝(1959)「体の底のイメージ」『新日本文学』6月号、新日本文学会、p.81

している。6) また原佑介は小林勝が描く植民地朝鮮の二重言語空間⁷⁾や植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の描かれ方について後期の作品を中心に分析をしている。8) 韓国国内においても崔俊鎬によって小林勝の植民地朝鮮認識について考察されている。9)

このように小林勝の作品の中でも植民地朝鮮を描いている作品については従来多くの研究がなされているにもかかわらず、『断層地帯』は小林勝の作品のなかでもほとんど注目されてこなかった作品である。『断層地帯』が注目されなかった理由は「失敗作」という批評が一般的だったことが挙げられる。田所泉は「『断層地帯』は失敗作であった」¹⁰⁾と断言し、その理由を「作者自身が気づいている構成上の破綻、女性や党機関の人間の描写にしばしばあらわれる人物の類型化、それに、全体をつうじて流れる、一種の被害者意識。作者は、弁明ではなく真剣な自己検討、自己批判を試みたのではあるが、(中略)幼時から党生活をつうじて、北原自身もまた意識的な「加害者」であることの意味を、えぐり出し提示することについて成功しなかった。じぶんが軽視した「方法」に裏切られたのであった」¹¹⁾と分析している。またあいざわ・かくも「断層地帯」について「『断層地帯』が失敗作であるというのは、残念ながらこの作品の批評者に共通の意見であろう¹²⁾」と述べ、「初期作品においてまとまりのよいしっかりした結構の中に定着されていた小林勝の<朝鮮>は『断層地帯』において、内なる<ふるさと>としての朝鮮と、自己の無力を証し立てる証拠物件としての(現実の)朝鮮とに分裂している」¹³⁾とし、「革命党内における「上級」と「下級」の<断層>、労働者と知識人の<断層>、党の組織維持と党員の自発性維持の<断層>、そして青春における性と思想の<断層>、現実変革への意思と生活経営への意思の<断層>……と、現代の青春が抱え込まざるをえないところの諸<断層>の問題を、あたかも財布の底をはたくようにしてぶちまけた

6) 磯貝治良(1982)「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品—」季刊三千里、三千里社、p.208

7) 原佑介(2014)「コメント(3):日本人植民者の戦後文学における二重言語空間—小林勝の植民地小説と朝鮮語—」『立命館言語文化研究』25巻2号

8) 原佑介(2010)「小林勝の近代日本認識と植民地朝鮮—小説「夜の次の風の夜」に描かれた暴力と抵抗の歴史—」『次世代人文社会研究』第7号、日韓次世代学術フォーラム

_____(2011)「「チョッパリ」とオクスニー小林勝の文学における植民者と「もう一つの」朝鮮—」『コア・エシックス』第7号、立命館大学先端総合学術研究科、pp.261-272

9) 崔俊鎬(2011)「고바야시 마사루의 식민지 조선 인식-초기 작품들 속의 인물표상을 중심으로」『日本語文学』第48輯、pp.139-156

_____(2012)「小林勝「無名の旗手たち」論—前期と後期作品群の結び目—」『日本語文学』第58輯、pp.281-300

10) 田所 泉(1971)「息のつづくかぎり—小林勝の文学」『新日本文学』7月号、新日本文学会、p.105

11) 同書、p.105

12) あいざわ・かく(1973)「想像力の基点としての<朝鮮>」『新日本文学』11月号、pp.45-46

13) 同書、p.46

観のある」¹⁴⁾と失敗の原因を分析している。これらのことから『断層地帯』が失敗作といわれる理由は小林勝の作品への接近法や方法論が原因であるといえることができる。確かに『断層地帯』は文学的には失敗といえるであろう。しかし『断層地帯』を視点を変えて見てみると、短編がほとんどである小林勝の作品の中で唯一の長編小説であり、現在は語られることのない戦後のある時期の青年たちの姿がリアルに描かれている経験物としての作品であるということが見えてくる。小林勝は『断層地帯』を文学的な価値よりも戦後日本の姿に重点を置いて描いたととらえることができるのである。このような観点でこの作品を分析考察することは、小林勝の作品群を考える上で大きな意味をもつと考える。

これらをふまえて本稿では『断層地帯』に描かれる戦後日本に注目するものである。小林勝が前述した植民地朝鮮に関する小説を描くきっかけになったのが刑務所内での朝鮮のイメージを取り出していたことに原点があるとすれば、そこに至るまでの過程を考察することで今まで見えなかった小林勝の姿が見えてくると考えた。今回は特に朝鮮戦争に注目し、朝鮮戦争を取り巻く日・米・韓と主人公北原との関係を通して戦後日本を考察した。すると戦後日本のさまざまな断層によってアジア・太平洋戦争へと回帰していく北原の姿があったのである。

2. 朝鮮への負債という自我の誕生

『断層地帯』は、主人公の北原が共産党の軍事行動隊結成の会議に参加している場面からはじまる。この会議の目的は共産党の武装行動に関する学習である。会議が開かれているのは1952年の春、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約が発効された直後である。1952年といえば東アジアにおける日本の位置が占領から防壁へと変化した戦後日本の分岐点といえる年であることをふまえ、この章ではまず北原が戦後の分岐点で軍事行動隊に参加するという選択をした理由に注目した。軍事行動に参加した背景には北原にとって絶対に譲れない<朝鮮への負債>を返すという戦後認識があることが見えてきたのである。

北原が入党したのは1947年で、敗戦から2年後のことである。これは北原が戦時中の一般的な認識である臣民思想から脱皮し、共産党に入党するまでに約2年の歳月を要したことを示している。この2年のうちに起こった出来事によって北原は<朝鮮への負債>という1945年

14) 同書、p.47

以前とは全く正反対の新しい戦後認識を生み出したことになる。北原が<朝鮮への負債>を持つに至る過程には敗戦直後の日本の空間が関係していたのであるが、それは引揚と日本という断層である。

北原は敗戦後、士官学校を除隊し朝鮮から引揚げてきた両親と共に父親の郷里のN県に戻った。しかし、初めて訪れた日本の親戚たちは北原たちを喜んで迎えるどころか北原一家を厄介者として扱った。北原の戦後認識の形成はまず親戚から拒絶されたことから始まったのである。

生れてはじめて見る郷里の村の人々の眼は、ぼくらに対して冷く、愛想笑い一つしないのだった。引揚げていったぼくの一家は、田や畑を親戚に永年貸していたのに、豆一合、麦一合すらもそれらの人々は持って来てくれようとしなかった。少年期の最後をむかえていたぼくは、その村を、村人を憎悪した。彼らにとって、ぼくは他所者であったし、ぼくにとっては彼らは異郷の人間であった。(p.172)¹⁵⁾

敗戦後、外地からの引揚者は自分の故郷に帰るか、身寄りがなかったり行くあてがない引揚者たちは全国に残された演習場跡などで生活していた。¹⁶⁾ 引揚者たちは外地に移住する際、二度と故郷に帰らない覚悟で移住した人々も多く、そのような人々の親戚たちは移住した者が外地から帰ってこない前提で土地財産を管理していたし、移住した者たちが突然自分達の生活空間に帰って来ても迷惑なだけであった。親戚たちが引揚者をあたたかく受容することは内外共に困難なことであったのである。

しかし北原はこのような親戚たちの事情を理解することはできなかった。外地で育った北原にとっての日本は美化された姿であったからである。日本人という自負と日本への憧憬¹⁷⁾は内地にいた日本人よりも強かったのである。植民者二世であるゆえの日本への過剰

15) 本稿における小林勝の小説の引用は『小林勝作品集』第2巻(1975)、白川書院、から行なった。引用のページ数は、本文引用後()で表記する。また、この作品集以外の引用については、その都度新たに記すことにする。

16) 大竹晴佳(2013)「戦後開拓集落の存続に関する一考察－岡山県下53開拓地の現状より－」『新見公立大学紀要』第34巻、p.67

「戦後開拓とは、第二次大戦後の引揚者や復員者の労働力吸収、および食糧不足への対策を旨として1945年に始められた、政策誘導による一連の開拓事業を指す。戦後開拓事業は、日本「国内」における最後の開拓と言われることからわかるように、事業開始当初すでに土地は開墾し尽くされており、手つかずのまま残されていた土地は、開墾困難な場所ばかりであった。政策としても高度経済成長が進む中、就農の推進から、選別的な離農の促進へと方向転換がなされ、1974年には事業目的そのものが役割を終えたとして、開拓農業協同組合の解散、開拓農政が一般農政に統合されたことをもって開拓事業は終了した。」

な憧れが故郷の人々への怒りとなり、日本に対する失望へと変化したのである。敗戦と引揚げという断層が北原の価値観の崩壊の引金となったのである。

北原はこの失望から逃れるために自分が生まれ育った故郷である朝鮮へと回帰することを試みる。北原は故郷の人々から自己否定されたことで初めて朝鮮と向き合う機会を得たのである。すると今までは知ることができなかった事実が見えてきたのである。実は北原自身が植民地朝鮮において朝鮮人を排除してきた加害者だったという事実である。

もうぼくの帰って行くべき郷里はないのだった。それはもう永久にないのだ。それは他国なのだ。ぼくはあそこへもし仮に帰ることがあるとしても、あそこの人々にとってぼくは帰ったのではなく訪れたのであり、そこではぼくは異郷の人間に過ぎない。そして日本の山の中でも、ぼくは他所者であり、帰ってきたのではなく、やって来たと村人は考えているのだった。(中略)ぼくが戻って行くあの朝鮮は古い朝鮮、永久に地上から姿を消し、既に歴史上の存在となり終わった朝鮮である。当時何も知らない子どもに過ぎなかったとはいえ、まぎれもなく日本人の一人として、ぼくはその古い朝鮮に対して負債をもつ。その負債は新しい朝鮮の人々に返さなければならないのだ。(p.173)

北原は故郷から拒絶されたことで、自分が帰ることができる朝鮮(植民地朝鮮)がこの地上には存在しないことに気が付いた。帰る場所がないということは独立した朝鮮が植民者だった北原を拒絶したことを示していた。北原は故郷を喪失したことで日本人と朝鮮人では植民地認識に違いがあったことを知ったのである。北原は朝鮮から拒絶された理由を故郷の人々から拒絶された自分と重ね合わせることで北原が日本の郷里で〈他所者〉であったように、植民地朝鮮でも北原は〈他所者〉だったという事実を導き出したのである。親戚が北原たちを邪魔者にしたように、植民地朝鮮の日本人は突然介入してきた招かれざる客で不必要な存在だったのである。

敗戦後、北原自身が日本から排他される経験したことで、植民地朝鮮における加害者としての自分を認識することができたのである。北原の〈朝鮮への負債〉を返すという戦後認識は引揚げという断層によって形成されたということができるのである。北原の戦後認識は一般的に言われているような植民地への反省から出発したのではなく、戦後日本からの拒絶から出発していたのである。

17) 小林勝の他の作品には、植民地朝鮮から日本を見るあこがれの視線が描かれている。

3. 北原と朝鮮戦争

朝鮮戦争が1950年6月にはじまった。北原が<朝鮮への負債>を返すという新しい自我を形成してから約5年後の出来事である。北原は朝鮮戦争がはじまったことで日本国内が米軍基地化されながら、それを容認しむしろアメリカに協力する戦後日本の姿を目の当たりにした。北原が抵抗したのは米軍であったが、真の相手は戦後日本の空間でだったのである。朝鮮戦争によって日本にはいくつかの断層が生まれることになる。

一つ目の断層は朝鮮戦争の勃発により戦後形成されつつあった冷戦体制が定着し戦後の日本の進路が大きく変化したことである。敗戦国だった日本は対米協力の下、東アジアの防壁と変化し冷戦体制へと組み込まれていった。1950年には警察予備隊が形成され、1951年にはサンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約が締結され、日本は独立国となった。日本は戦争が終わってまだ5年もたっていないうちに再軍備をはじめることになったのである。

共産党員の北原がアメリカを敵視するのは、当時の共産党の方針が反米の立場をとっていたことに照らしあわせるとごく自然なことである。しかし北原がアメリカを敵視する理由は他にあった。米軍が基地をつくった場所が北原にとってアジア・太平洋戦争中の戦争認識の中心であった陸軍航空士官学校の跡地だったからである。

その場所こそ、日本の少年たちが空で死ぬために生きていた場所であったこと、そして今そこが朝鮮を攻撃する極東空軍の基地になっているというこの歴史の組み合わせに露ほどの関心を示さないことを許せないと考えるようになっていた。(p.32)

陸軍航空士官学校(以下 航空士官学校)は1938年埼玉県豊岡町に設立され、敗戦後はすぐにアメリカ軍が接収、ジョンソン基地と呼ばれるようになった。そして朝鮮戦争が始まると日本における最前線基地として朝鮮を攻撃するための重要な位置を占める基地となった。この基地は敗戦を境に存在意味が大きく変化していて、戦後日本の姿を象徴している場所ともいえる。一方北原にとってこの場所は士官生徒として戦争を生きた自分を証明する場所だった。航空士官学校士官学校で訓練を受けた生徒は1万人にのぼるとされ、その中には特攻隊員となって死んでいった多くの生徒も含まれている。¹⁸⁾ 北原が航空士官学校に来たときも特攻要員になることが前提だった。北原がこの場所にこだわる理由はこの場所

18) 毎日新聞社(1981)『別冊1億人の昭和史 陸士・陸幼』、p.205

で死を覚悟し、死ぬために生きていた場所だったからである。しかし士官学校を接収したアメリカは「北原の記憶の中にあるすべてのもの」を「もはや何一つ現実に形をもっていない」(p.32)場所へと作り上げた。それは北原の戦争の記憶を完全否定する行為だった。

朝鮮戦争が始まったとき北原が共産党の軍事行動隊に参加を決意したのはアメリカに武力で対抗するという明確なスローガンを掲げていたからである。北原のアメリカに対する憎悪が共産党の反米と結び付いて「アメリカの野郎がいけないんだ。朝鮮をみろ、あのざまだ。外側からめっちゃめっちゃにしている。日本は内側からめっちゃめっちゃにされているんだ。」(p.24)と、戦後日本の対朝鮮政策の責任までもアメリカに転嫁したのである。

ところで、当時の一般的な日本人がアメリカの占領に対して北原のような感情を持っていたかと言えばそうではない。朝鮮戦争は日本人の中にまた戦争が始まるのではないかという不安と、5年前のアジア・太平洋戦争の記憶を呼び起こさせた。しかし朝鮮戦争が始まると現実には戦争の火の粉が日本に降りかかるどころかむしろ経済が活性化し、戦後の復興を後押しした。これが2つ目の朝鮮特需という断層である。朝鮮特需は米軍からの爆弾や小銃弾の製造、輸送用のトラック、鉄道貨車の調達、毛布、防寒衣類などの繊維類、の大量発注によって受けた特需¹⁹⁾である。朝鮮特需の内容を見ると朝鮮戦争で多くの命が奪われた原因の一端を日本国民が担っていたことが分かる。5年前までは敵国だったアメリカによって日本は経済復興の足掛かりを掴むようになったが、日本人は貧困からの脱出のために朝鮮を犠牲にしたのである。

また日本人の対米感情は経済だけで形成されたわけではない。日本人は押し付けられたアメリカ文化に速いスピードで適応していったことも挙げられる。この小説にはアメリカに対して北原と対照的な感情を持っている人物が登場する。それが米軍基地で働いている北原の恋人である都崎順子(以下 順子)という女性である。

順子と北原は植民地朝鮮時代の幼なじみで、順子の父親の転勤で二人は別れ離れになったが敗戦後の東京で再会して恋人同士になる。北原が敗戦後に出会った順子はアメリカ空軍基地の大尉の家でメイドとして働いていた。順子が米軍基地で働く理由は貧困である。順子の家族は北原のように両親の郷里に帰らずに演習場跡で開墾生活を送っていた。日本に生活の基盤がない順子は米軍基地のメイドとして働きながら一家の家計を支えていたのである。順子が米軍基地を選んだのは敗戦後における女性の職場の減少にある。敗戦後、女性たちは戦争から引揚げてきた男性たちに仕事場を引き渡さなければならず、女性が日

19) 姜在彦・李哲・李進熙「座談会 解放後十年の在日朝鮮人運動」『季刊 三千里』48号、三千里社、p.30

本国内で仕事場を見つけることは困難であった。そのような環境で米軍基地での仕事は数少ない女性たちの働く場所だったのである。共産党員の北原にとって米軍は敵であり、敵地で働かなければならない順子を不憫に思っている。しかし順子にとっての米軍は北原が抱く対米感情とは全く違うものである。米軍によって自分の生活が支えられているだけでなく、時代の最先端であるアメリカ文化と一番近い場所で仕事をしているという自負があったためである。戦後日本に流入したアメリカ文化は衣食住にいたるまで日本人のあこがれの対象だったからである。

このような順子のアメリカに対する態度は、戦後の日本人のアメリカ認識を代表しているものである。朝鮮戦争がはじまっても順子のアメリカに対する認識は変化しない。北原と同様に植民地朝鮮を経験していたとしても順子にとっての植民地朝鮮とは過去のものであり、現在とは断絶したものである。むしろ米軍を敵視する北原を理解できず、二人の間には確執が生じることになる。士官学校とジョンソン基地という同一の場所にあった2つの空間は過去に執着する北原と新しい時代を生きる順子の姿であり、戦後日本の縮図を見せてくれているのである。

朝鮮戦争は外的には戦後日本の進路、朝鮮特需、アメリカ文化の受容という断層を生み出した。と同時に内的には北原に代表されるアメリカの占領に対して反発する断層と順子のようにアメリカを容認する断層をつくり出した。この二つの内的断層が戦後認識の形成において対立することになるのだが、現代において記憶される朝鮮戦争は順子のような戦後認識である。これは朝鮮特需に特化された記憶のされ方であり、アメリカのパートナーとしての日本という戦後認識である。

しかしその一方で北原のような戦後認識はほとんど記憶されなくなってしまう。これまでの考察から記憶されなかった理由は朝鮮戦争によってつくられた3つの断層を日本人が選択する際、かつての植民地だった朝鮮を犠牲にしたからである。北原が朝鮮戦争反対運動で闘っていたのは日本国内における3つの断層だったのである。

敗戦後日本は良くも悪くもアジア・太平洋戦争の戦争認識を放棄した。しかしそれに便乗して捨ててはいけないうもの、この小説でいうと朝鮮問題であるが、これを過去の問題として廃棄しようとしたのが戦後日本である。それが戦後の朝鮮政策であり、朝鮮戦争がはじまっても朝鮮にいる人々を無視してアメリカを支援することを可能にした。朝鮮戦争反対運動に参加したのが在日朝鮮人たちと共産党員が大部分だったことを考えると日本人の朝鮮観が戦中戦後と大きな変化をむかえることができなかったことをしめしている。北原は日本における戦後の朝鮮観についてアメリカが関与しているものと考えていたが、実は朝

鮮観は日本人が作り上げたものであった。北原は逮捕されることでこのことに気付くことになる。

4. 強制送還される朝鮮人

北原は国際平和集会(朝鮮戦争反対集会)に参加したときに、火焰壘を投げた現行犯として逮捕される。逮捕されたことで北原は戦後における二度目の分岐点をむかえることになるのだが、そのきっかけが強制送還される朝鮮人との出会いであった。強制送還を断層の一つとする理由は朝鮮人たちの人権を無視した非人道的な強制送還が日本政府主導で行なわれていたからである。北原は在日朝鮮人問題もアメリカに責任があると考えていた。しかし実際は在日朝鮮人問題は日本がつくったものであり、強制送還に関しても日本政府によって主導され意図的に行われたものだった。『断層地帯』には日本によって強制送還される宗在殷²⁰⁾という朝鮮人の男が登場する。本章では北原にとって強制送還が分岐点となる理由について宗在殷を中心として考察していくことにする。

北原が宗在殷に出会ったのは火焰壘事件の現行犯として公安に逮捕されて警察の留置所にいたときである。宗在殷が留置所に送られてきたのは朝鮮に強制送還されるためであったのだが、この逮捕は宗在殷にとっては初めての逮捕ではなく、実は2度目の逮捕だったことに注目しなければならない。2度目の逮捕は共産党員の宗在殷を強制送還するために逮捕したものだったからである。

宗在殷の一度目の逮捕は1948年頃だと考えられる。宗在殷が逮捕された理由は小説内には直接描かれていないが1948年前後という時代を考慮すると、各地で繰り広げられていた在日朝鮮人の権利回復のための闘争²¹⁾だと考えられる。闘争は共産党との協力下で行われていたこともあって、日本政府の在日朝鮮人たちに対する取締りがさらに強化されることになる。宗在殷はこの活動の途中で逮捕されたと考えられるのである。しかし宗在殷はこの段階では強制送還されていない。宗在殷が強制送還されるのは1度目の刑が終わったあと2度目の逮捕のときである。

戦後の在日朝鮮人問題は多々あるのだが、その中で宗在殷の強制送還と関係あるのは外

20) 宗在殷は実在人物である。注4)参照

21) 1948年に「朝鮮人の子どもたちは日本の学校に入るようにという内容」でGHQが公布した「在日朝鮮人に告ぐ」に対する闘争

国人登録令である。この法律ができたのは1947年5月である。この法律が矛盾を含んでいる根拠は在日朝鮮人が「日本国籍を有する者」だったにもかかわらず、外国人登録をしなければならなかったことである。この法律によって在日朝鮮人たちも法律に違反すれば「合法的」に強制送還することができるようになっただけでなく、1949年12月からはGHQが行っていた強制送還を日本政府が全面的に行うようになったことで²²⁾外国人登録令を改正(同12月)して管理体制を強化した。さらに1952年4月28日に発効されたサンフランシスコ講和条約では在日朝鮮人たちの日本国籍は剥奪され在日朝鮮人たちは外国人となり「外国人登録法」と「出入国管理令」(1951年11月1日施行)が全面的に適応されることになる。

宗在殷が出所するやいなや逮捕されたのはサンフランシスコ講和条約が発効されたとき服役中だったため日本国籍が消失し、外国人登録もしていない(できなかった)法律違反の朝鮮人(外国人)だったからである。宗在殷は出所と同時に強制送還の対象者となり、戦後日本において共産党と共に在日朝鮮人の主権・権利回復のために活動してきた宗在殷は、法律が制定されたことも知らずに強制送還されるのである。

北原にとって宗在殷は何を意味しているのだろうか。宗在殷が北原に対して「同務(トンム)」(p.113)と呼んでいるように二人に共通しているものは共産党員であるということである。宗在殷が共産党員になったのは敗戦後の在日朝鮮人運動が共産党と共にあったからである。一方の北原も共産党に入党した理由も<朝鮮の負債>を返すために、戦後唯一在日朝鮮人運動を支援していたのが共産党だったからである。宗在殷と北原は共産党員というだけでなく戦後日本において生きる目的が同じだったのである。

「三年のひとやを出でて我を待つ、また新しき手錠の光」

北原は声を出して繰り返した。紙もなく、鉛筆もない。しかし、自分は決してこれを忘れないだろう、と彼は思った。恐らく一生忘れられないだろう。日本に生れて日本で育った朝鮮人が、死の待ちうけている故国へ帰る間際にうたった歌を。そして、日本人は黙って一つの小さな死を見送ろうとしているのだ。(p.115)

この詩は宗在殷が拘置所から大村収容所に送られる直前に北原に託したものである。こ

22) 飛田雄一(1986)「GHQ占領下の在日朝鮮人の強制送還」『季刊三千里』第48号、pp.72-73

GHQ側は密入国者については強制送還すると言っている。しかし日本政府側は、一九四七年五月二日の外国人登録令で「みなし規定」によって密入国者でない在日朝鮮人の送還をGHQに認めさせた「既成事実」を武器に、密入国者、外国人登録令違反者に加えてそれ以外の在日朝鮮人も強制送還できると主張するのである。

の歌からは、服役を終えやっと刑務所から出てきたのに、安堵する間もなく手錠がかけられ、死を覚悟しなければならぬ宗在殷の無念さが感じられる。その一方で見送る「日本人」、つまり北原は強制送還されれば殺されることが分かっているながら助けることもできない苛立ちと、〈朝鮮への負債〉を返すために活動してきたにもかかわらず宗在殷を救うことができない自分自身に対する怒りが滲み出ている。北原にとって宗在殷との出会いは「決して忘れないだろう」と言っているように、その後の人生に大きな影響を与える事件となるのである。

在日朝鮮人たちのこのような現実、当時どれほどの日本人たちが関心をもっていただろうか。宗在殷が北原に対して「死にたくない」と訴えた言葉に対して、北原を含めた多くの日本人たちは無関心だったのである。宗在殷との出会いが北原にとって事件だったのもこの点にある。北原が共産党で活動してきた内容は在日朝鮮人のためではなかったからである。北原の活動の中心は反米運動であり、在日朝鮮人の権利回復ではなかった。北原が拘置所の中で外国人出入国管理庁に勤務していた二四九番から「刑務所から出た男を、すぐこの警視庁の留置場へ連行する仕事もする」(p.111)という話をきいたとき、北原は「刑務所から?だって釈放された朝鮮人なんでしょう?」(p.111)と言っていることから北原は強制送還される過程については無知だったことが理解できる。それだけでなく〈朝鮮への負債〉を返すための手段として選択した共産党の過激な行動も在日朝鮮人たちに対する日本人たちのイメージをさらに悪化させていたことにも北原は気づかなかった。〈朝鮮への負債〉を返すと決意して出発した戦後認識であったが〈朝鮮への負債〉を返すどころかむしろ負債を重ねていたのである。

では〈朝鮮への負債〉を常に意識していた北原がなぜ在日朝鮮人問題について無知だったのだろうか。それは朝鮮戦争が始まったことにより在日朝鮮人運動のスローガンが権利回復から朝鮮に平和をとという平和擁護運動と米軍の軍事活動阻止へと変わったからである。これは当時在日朝鮮人たちの中心団体であった在日朝鮮人統一民主戦線(以下 民戦)と共産党の関係を見ると明らかである。当時の民戦は在日朝鮮人の共産党員が指導していたが彼等は朝鮮語がよく話せなかったため共産党の文献を見て指導していたし、民戦の結成の同時期(1951年1月)には共産党が武力闘争方針を出していたし、共産党と民戦が同じスローガンで活動した²³⁾のはやむを得なかったのである。北原の非合法活動と在日朝鮮人たちの活動は同一のものであったため北原が在日朝鮮人問題について知らなかったのは仕方がない

23) 姜在彦・李哲・李進熙「座談会 解放後十年の在日朝鮮人運動」『季刊 三千里』48号、三千里社、pp.31-33

ことであった。北原は宗在殷に出会ったことで〈朝鮮への負債〉をつくった原因を共産党員の自分に見出し、²⁴⁾ 〈朝鮮への負債〉について再び向き合うことになるのである。

5. ターニングポイントとしての1952年

1952年は敗戦後の日本がターニングポイントをむかえる重要な年である。その理由は1952年4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効し、日本が独立国としての主権を回復しただけでなく、同時に日米安全保障条約も発効され日本は東アジアの防壁として再軍備をはじめ年だからである。サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約が同時に締結される背景には冷戦体制の形成と朝鮮戦争があったのであるが、敗戦後間もなく出現した新しい世界情勢は共産党は再び弾圧される立場になる。これに反発した北原は1952年の6月、朝鮮戦争反対集会で火焰壘を投げた現行犯として逮捕される。しかし北原を追い詰めたのは逮捕されたことではなく、GHQと日本政府に対し共に闘っていたはずの共産党からも切り捨てられたことであった。本章ではこれを北原の戦後第2のターニングポイントと位置づけたのだが、1952年という年に注目すると両者のターニングポイントが偶然ではないことが見えてきたのである。

北原がターニングポイントをむかえる直接の原因は共産党が北原を切り捨てたことにある。そして1952年9月に行なわれた総選挙で共産党が一議席もとれなかったことは北原の活動が日本国民に受け入れられていなかったことを意味していた。第3章で述べたように北原にとっての朝鮮戦争は日本国内における朝鮮観との闘いであった。軍事行動隊に参加したときも「今や全国民は決然とした党の行動を求め、指示している」、「党の権威と信頼は、かつてないほど、国民のあいだに増大している」(p.209)という共産党の宣伝を鵜呑みにして、日本国民の代表として闘っているはずであった。しかし現実の共産党は方針が右往左往して弱体化し、さらに9月革命説によって共産党は内部分裂していた(「50年問題」)。²⁵⁾ 司令塔の不安定さはそれまで一緒に活動してきた党員たちを疑心暗鬼におとし入れ、「臨時中央指

24) 小林勝(1970)「私の『朝鮮』」『チョッパリ』三省堂、p.297

「堀の外でも中でも、君たちにどうしてやることも出来なかったぼくたち日本の共産主義者」

25) 『日本共産党七十年 上』(1994年)日本共産党中央委員会、p.210

「第六回大会選出の中央委員会が、1950年6月6日のマッカーサーの弾圧を機に徳田球一、野坂参三を中心とした「政治局の多数」の分派活動によって、解体、分裂させられ、全党が分裂と混乱になげこまれた深刻な事態のこと」

導部」に賛同しない者たちにはスパイの疑いをかけ除名に追い込むという非論理的な組織へと変化した。この小説でいうと北原の親友の柴山という青年がこの被害者である。

北原と柴山は学生運動を共に行った親友であり、北原にとっては尊敬の対象であった。にもかかわらず北原が柴山を除名に追い込む側にたったのは、アジア・太平洋戦争中の自我に回帰していたためである。戦争中の自我とは軍人精神である。この軍人精神は士官学校という特殊な空間の中で階級への絶対服従によって定着させられていき、敗戦によって一度は崩壊したかのように思われた。しかし北原が戦後の自我を共産党に求めた時、主従関係を重要視した軍人精神が復活したのである。北原の戦後の自我は忠誠を誓う対象が国から共産党に、天皇から徳田球一²⁶⁾へと代わっただけで戦争中の帝国主義的思考を戦後においてもそのまま持ち込んでしまったのである。

柴山を追放した2つ目の原因は<朝鮮への負債>に固執するばかりに北原が共産党の非論理的なものをすべて肯定したことである。レッド・パージで大学を追放され、労働者となり、「もっと勉強したかった」(p.54)と後悔しながらも共産党員として活動したのは<朝鮮への負債>を返すためであった。臨時指導部の「朝鮮戦争をはじめるために、マックはわが党の中央を公職から追放した。そういう未曾有の時期にだな、中央委員会を開けなて!」(p.37)という非論理展開も<朝鮮への負債>の前には正当性を持つ理論として展開されるのである。この展開の仕方はアジア・太平洋戦争時に行なわれていた思想教育と同様である。戦争に反対する者は非国民として村八分にされたような出来事が戦後の民主主義社会の中で行なわれていたのである。

では北原だけがアジア・太平洋戦争時に回帰していたのかといえばそうではない。北原が戦争中の自分へと回帰しているように日本も朝鮮戦争を期に逆コースをたどっているのである。日本国内では朝鮮戦争を期に警察予備隊(現自衛隊)が作られ、サンフランシスコ講和条約の発効により戦犯たちは免罪され、安全保障の名の下に再び軍事化していった。この過程で在日朝鮮人問題や反米感情は日本の戦後認識に妨害となるものであったゆえに日本社会から弾圧・追放されていくのである。日本の戦後の転換期といえる1952年は日本が過去へ回帰した年だったといえるのである。

『断層地帯』に描かれている1952年は武力で支配されていた戦争中と変わらない姿であったことが見えてくる。そのような中でも北原が戦争中と同じ過ちを繰り返さないチャンス

26) 「ほやほやの党員であるぼくは、その大きなゼスチャや、奇怪な風貌や、ほとんど駄じゃれにも等しいことを堂々と言っているのは笑いを起こさせる書記官を眺め、いっぺんに惚れこんでしまったのだ」(p.147)

が一度だけあった。それが柴山との関係性を維持することである。そうすることで北原はアジア・太平洋戦争時の過ち、例えば国粹主義のもとルールを無視した強引な戦争に代表される軍国主義、を繰り返すことはなかったのである。

北原の<朝鮮への負債>ももとはここに原因があるにもかかわらず、北原はアジア・太平洋戦争中にはそれに気付くことができず、さらに1952年にも同じ過ちをに繰り返したことで<朝鮮への負債>を返すことができない原因を形成したのである。北原と1952年の共通点はアジア・太平洋戦争時への回帰であり、これらが同時期に行なわれたのが偶然でないといえるのは両者が朝鮮戦争を中心として行なわれ、戦後日本も回帰の過程において北原同様に戦争中と同じ過ちを繰り返していたからである。その過ちとは朝鮮に対する反省がなされなかったことで、北原が柴山の言うことに耳を傾けることができなかったように戦後日本では在日朝鮮人たちの声を無視しただけでなく、朝鮮戦争に反対する北原たちの声を無視したことである。両者の関係は戦後の断層の中で極と極の立場にあったにもかかわらず、アジア・太平洋戦争中の過ちを繰り返したことは共通していたのである。北原の戦後二度目の挫折は過ちを克服することができなかったゆえに必然的に起きた現象である。しかし北原はこれをきっかけとして共産黨員として生きた戦後を振り返り、対峙して新しい戦後を生きていくことになる。現代における韓日関係もこれに照らし合わせてみたい。両国の複雑さが1952年に遡って考えると必然的な現象だとすれば、現代は新しい韓日関係を築く機会となりえるのではないかと考えられるのである。

6. さいごに

北原が経験した戦後は朝鮮戦争を境界として別の姿へと変化する。韓半島が冷戦の中心となったとき、日本は朝鮮への保障をするどころかむしろアジア・太平洋戦争に回帰することで独立国日本になっていった。北原の戦後の自我の中心である<朝鮮への負債>も朝鮮戦争が始まったことで反米闘争へとすり替えられ、<朝鮮への負債>は返せなかっただけでなく挫折してしまうことになる。『断層地帯』に描かれていた断層は朝鮮戦争によって生まれた断層で、北原は断層の軋みの中で生きていた青年だったのである。北原が経験した1950年代はほとんど語られることはない。共産党でさえ北原のような青年たちのことについては沈黙を守ったままである。

小林勝が刑務所の中で朝鮮のイメージを書き出していったのは<朝鮮への負債>を返すことができなかったからである。最初の作品を強制送還される朝鮮人をモチーフにしたのも朝鮮人に対しての負債を返すためだったのである。小林勝は『断層地帯』を通して<朝鮮への負債>を返すことができなかった自己を批判しているのではないだろうか。だとすれば『断層地帯』が未熟で完成されていない文学だったとしても、現代において解決されたとはいえない<朝鮮への負債>について考えるきっかけを与えてくれる作品だといえるのである。

【参考文献】

- 小林勝(1952)「ある朝鮮人の話」『人民文学』12月号
 _____(1955)「十年」『新日本文学』11月号、新日本文学会、p.261
 _____(1959)「体の底のイメージ」『新日本文学』6月号、p.81
 _____(1970)「私の「朝鮮」」『チョッパリ』三省堂、p.297
 _____(1975)『小林勝作品集一第2巻』白川書院
 磯貝治良(1982)「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品—」季刊三千里、三千里社、p.208
 原佑介(2010)「小林勝の近代日本認識と植民地朝鮮—小説「夜の次の風の夜」に描かれた暴力と抵抗の歴史—」『次世代人文社会研究』第7号、日韓次世代学術フォーラム
 _____(2011)「「チョッパリ」とオクスニー小林勝の文学における植民者と「もう一つの」朝鮮—」『コア・エシックス』第7号、立命館大学先端総合学術研究科、pp.261-272
 _____(2014)「コメント(3):日本人植民者の戦後文学における二重言語空間—小林勝の植民地小説と朝鮮語—」『立命館言語文化研究』25巻2号
 崔俊鎬(2011)「고바야시 마사루의 식민지 조선 인식-초기 작품들 속의 인물표상을 중심으로」『日本語文学』第48輯、pp.139-156
 _____(2012)「小林勝「無名の旗手たち」論—前期と後期作品群の結び目」『日本語文学』第58輯、pp.281-300
 田所 泉(1971)「息のつづくかぎり—小林勝の文学」『新日本文学』7月号、新日本文学会、p.105
 あいざわ・かく(1973)「想像力の基点としての<朝鮮>」『新日本文学』11月号、新日本文学会、pp.45-47
 日本共産党中央委員会(1994)『日本共産党七十年 上』、p.210
 大竹晴佳(2013)「戦後開拓集落の存続に関する一考察—岡山県下53開拓地の現状より—」『新見公立大学紀要』第34巻、p.67
 毎日新聞社(1981)『別冊1億人の昭和史 陸士・陸幼』、p.205
 飛田雄一(1986)「GHQ占領下の在日朝鮮人の強制送還」『季刊三千里』第48号、pp.72-73
 姜在彦・李哲・李進熙「座談会解放後十年の在日朝鮮人運動」『季刊三千里』48号、三千里社、pp.30-33、pp.72-73

논문투고일 : 2016년 12월 14일
 심사개시일 : 2017년 01월 06일
 1차 수정일 : 2017년 02월 03일
 2차 수정일 : 2017년 02월 08일
 게재확정일 : 2017년 02월 15일

 <要旨>

1952年と戦後日本の断層

- 小林勝の『断層地帯』に見える戦後認識 -

井上幸子

本稿は、小林勝の『断層地帯』における主人公の戦後の戦争認識についての変移を考察するものである。この小説の初版は1958年に発表されその後3回刊行されているが、小林勝作品の中では唯一の長編作品である。しかし小林勝の作品の中ではあまり注目されてこなかった作品である。

この小説は1952年の朝鮮戦争反対デモを中心として構成されており、主人公の北原が朝鮮戦争反対闘争に関わっていく過程を描いている。植民者二世であり復員兵の主人公は〈朝鮮への負債〉を返すために日本共産党に入党した。主人公の行動は戦後日本の朝鮮認識と連結しており、主人公の目を通して見る戦後日本は、朝鮮問題をなおざりにして発展していく日本の姿であった。この問題は現在にも連結しており、一般的ではない主人公の戦後を考察することは、これからの日韓関係を考える上でも重要なことだと考える。

本稿では小林勝の『断層地帯』を通して、戦後の戦争認識について考察していくものである。特に敗戦後、共産党活動時期、逮捕後に分類し〈朝鮮への負債〉の変化を考察することにする。すると、〈朝鮮への負債〉を返すことが小林勝の戦後に一貫した認識であったにも関わらず『断層地帯』に描かれている戦後日本空間を見ると〈朝鮮への負債〉にわずかな変化が起きたことが見えてきた。

1952year and Post-war Japan's fault

- Post-war perception from Kobayashi Masaru's "fault area" -

Inoue, Sachiko

This article is to analyze the transformation of pre- and post-war perception about the war seen from the protagonist in Kobayashi Masaru's "fault area". The first edition of the novel was announced in 1958 and was reprinted three times. This novel is the only full-length novel from Kobayashi Masaru. However, it did not receive great attention from the audience.

This novel focuses on the anti-war demonstration for the Korean war in 1952, describing the process of how the protagonist, Kitahara, got involved in the anti-war demonstration. He, a second generation of the colony and a returned soldier, joined Japanese communist because he wanted to repay the "debt from Chosun". His decision is linked to the Japan's post-war perception about Chosun, and the protagonist viewed Japan's development is partially achieved by neglecting Chosun's problems. This issue could be found in modern Japanese society, and analyzing the abnormal perception of the protagonist is thought to be important for considering future relationship between Korea and Japan.

This article is to analyze the post-war perception about war through Kobayashi Masaru's novel "fault area". Especially, this article will describe the transformation of perception regarding "the debt for Chosun" in three phase; after the defeat, during the activity of communism, and after the arrest. Despite the consistency, Kobayashi Masaru's 'indebted' perception for Chosun was found to be slightly transformed in the description from the novel "fault area".